教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 日本語日本文学科　　資格： 教授　　氏名： 鈴木　隆司

研究分野	研究内容のキーワード
中古文学	和歌 物語 日記 婚姻史
学位	最終学歴
博士（文学） 修士（文学） 学士（文学）	京都大学大学院文学研究科　博士後期課程　学修退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.伊勢物語　虚構の成立	共	2008年12月	竹林舎	本書は、現在における伊勢物語研究の集成を、『伊勢物語　成立と享受』（全２冊）としてまとめることを意図して企画されたものである。 本人担当部分：「伊勢物語と私家集」 伊勢物語と業平集、さらには業平集以外の私家集（小町集、猿丸集、伊勢集など）の間の諸問題について検討し、特に歌物語の発生と私家集、業平集の成立と構成についての検討を行った。
2.伊勢物語古注釈大成（第３巻）	共	2008年9月	笠間書院	本書は、室町時代の伊勢物語注釈である、『伊勢物語愚見抄』、『伊勢物語肖聞抄（文明九年本）』『伊勢物語肖聞抄（延徳三年本）』、『伊勢物語山口記』の４種の古注釈について、翻刻し解題を付したものである。 本人担当部分：冷泉家時雨亭文庫蔵本『伊勢物語愚見抄』、片桐洋一蔵本『伊勢物語肖聞抄（文明九年本）』を翻刻し、解題を付した。解題は、書誌、諸本の関係、注釈の特色について、特に後者については、同時代の伊勢物語注釈に広く記される「祇注」について調査し、整理した。
3.伊勢物語古注釈大成（第２巻）	共	2005年5月	笠間書院	本書は、鎌倉時代の伊勢物語注釈である、『和歌知顕集（書陵部本系統）』、『和歌知顕集（島原文庫本系統）』『伊勢物語難儀注』、『伊勢物語髄脳』の４種の古注釈について、翻刻し解題を付したものである。 本人担当部分：『伊勢物語難儀注』、冷泉家時雨亭文庫蔵本『伊勢物語難儀注』を翻刻し、解題を付した。解題は、書誌、諸本の関係、注釈の特色について調査し、整理した。
2 学位論文				
1.伊勢物語の享受についての研究（博士論文）	単	2002年3月	京都大学	第１編「中世における伊勢物語享受の問題」、第２編「業平集についての諸問題」として、平安時代末期から中世にかけての伊勢物語の享受の諸相について、伊勢物語古注釈と業平集諸本を中心に文献学的に研究を進め、従来の諸説の問題点を整理した上で、新たな視

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
2.業平集考―在中将集への展開を中心に―（修士論文）	単	1997年3月	京都大学	点を提示した。これにより「京都大学博士（文学）」を取得。 現存する４系統の業平集のうち、在中将集を中心に、他の業平集諸本との関係を考え、さらに成立年代の推定を行った。さらに東山御文庫本業平朝臣集についての考察を加え、在中将集、西本願寺本の両集の関係を軸に、より精密に家集の相互関係とそれぞれの成立過程や成立年代についての考察を加えた。これにより「京都大学修士（文学）」を取得。
3 学術論文				
1.蜻蛉日記の「時姫」	単	2017年5月	『国語国文』第86巻4号	蜻蛉日記において登場する兼家の妻妾のうち、時姫はその素性が一切示されない点、道綱母と和歌のやりとりが記される点で、他の女性たちとは大きく扱いが異なっていることを示した上で、道綱母と時姫が歌を交わす三つの場面について、問題点を整理した。結果として、日記中の記述には史実の時姫からは考えにくい記述があること、事実ありのままであるとすると道綱母が記す意図がわからない記述があることから、現実の時姫と作品中の時姫を過度に同一視してきた従来の読み方に問題があること、またその問題が時姫関連場面だけでなく、蜻蛉日記全体に及ぶものであることを論じた。
2.蜻蛉日記冒頭場面追考	単	2015年7月	『国語国文』第84巻7号	文学作品を論じる際の前提、論者が無意識に抱いている先入観ということを念頭に置いて、前稿「蜻蛉日記序説―いわゆる「兼家の求婚」場面を中心に―」に対する批判に答えつつ、蜻蛉日記冒頭場面で従来兼家の非常識な行動とされていた「父親を通した申し入れ」「馬に乗った使者の派遣」「料紙・筆跡のひどい手紙」の３点について、特に２点目について同時代の諸例を検討した上で、従来の通説とは異なる新見を提示した。
3.「例の人」「例のやう」考―蜻蛉日記冒頭場面の解釈をめぐって―	単	2012年12月	『高知大国文』第43号	蜻蛉日記冒頭のいわゆる「求婚」場面では、兼家の態度について、二度にわたり「例の」ようではないと述べられている。従来この「例の」に対しては「普通の、世間一般の」と解するのが通説であるが、日記冒頭に作者自身が軽んじられた話を記す必然性がないとする批判もある。本稿においては、蜻蛉日記および同時代の文学作品における「例の」の用例を精査した上で、当該場面の「例の」が「これまでの、従来の」という作者の過去の経験に根ざした兼家への不審であると読むべきことを示した。またこれと併せて、この場面の理解がそうであるように、古典文学作品を理解するにあたって享受者が持つ価値観が、時に作品理解に大きな歪みをもたらす問題についても指摘した。
4.蜻蛉日記序説―いわゆる「兼家の求婚」場面を中心に―	単	2012年10月	『国語国文』第81巻10号	蜻蛉日記冒頭で兼家が作者の父親を通して求婚することの不審について、従来は不審の理由がはっきり説明されてこなかった。この点は当時の結婚・求婚についての理解と直結する問題であり、軽視できない。本稿においては、摂関家男子の男女関係について精査した上で、これまで当然のように考えられてきた、作者と兼家の関係を「結婚」とすること、時姫が兼家の「正妻」であることへの疑問を提示し、作者への求婚の問題点について、新たな読みの可能性を提示した。また、併せて平安時代の婚姻研究についての問題点を提起した。
5.「月やあらぬ」歌の解釈について	単	2010年12月	『高知大国文』第41号	「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」の歌は、在原業平の代表的な名歌とされてきた一首であるが、古くからその解釈をめぐって議論の多い歌でもある。本稿においては、この歌についての語法的な問題となる二つの「や」の解釈についての検討を加えた上で、この歌を収録する伊勢物語・古今和歌集の記述を離れた一首の歌としての解釈と伊勢物語歌・古今和歌集歌としての解釈を別に考えることにより、この歌についての新たな解釈の可能性を提示した。
6.新撰和歌の構造―巻一春秋を中心に―	単	2004年12月	『高知大国文』第35号	新撰和歌の構造については、従来、「共通語句による対偶」ということへの賛否を軸に展開され、そのことが集の評価にも結びつけられて論じられてきた。本稿は、従来の緒論の見解を踏まえた上で、個々の歌の中に、集の中の１首の歌であると同時に歌題の転換など和歌の配列と全体の構成を規定する歌が相当数見出せることを指摘し、和歌の配列・集の構造という点に、従来にない見解を加えた。
7.伊勢物語の非業平歌	単	2002年1月	『国語国文』第71	伊勢物語のなかには多くの万葉歌・古今集の読人不知歌が含まれて

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
―享受の方法について―			巻1号	いる。このことは伊勢物語の成立を考える上で重要な問題であるが、このことがどのように理解されてきたのかという享受史の上での問題もある。特に伊勢物語が業平の実録と考えられていた中世における勅撰集・古注釈の記事を検討すると、実録の否定・歌の実作の否定という二通りの理解の方法があったことがわかる。この二通りの使い分けられ方の検討により、注釈姿勢・物語全体の理解などをより明確なものとした。
8.新古今集・新勅撰集の大和物語歌	単	2001年11月	『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院	新古今集・新勅撰集と大和物語とのあいだには合わせて二十四首の共通歌があるが、歌句・詞書・作者についての検討から、その多くは大和物語を直接の出典とするものと考えられ、二十四首のうち「わびぬれば」（新勅撰八八四）の歌を除いた二十三首までは、大和物語の記事とのあいだに矛盾がない。問題となった一首は、大和物語の記事はすべて実録と信じられていたことを前提として、大和物語の作中人物が古歌を詠じたと理解されていたとするのが自然であることを明らかにした。
9.伊勢物語と伊勢物語歌の理解―新古今集・新勅撰集における作者の問題―	単	2000年11月	『京都大学国文学論叢』第5号	新古今集・新勅撰集に記される作者名に問題のある歌について一首ごとに検討を加えた。検討の結果、原則として、①伊勢物語の本文理解の問題、②実録ではないと理解された、③歌が実作ではない（他人の歌の借用）と理解された、の三点からその理由を考えることができた。③のような理由はこれまでには考えられていなかったようであるが、伊勢物語の「男」の歌でありながら「よみ人知らず」とされる十首のうち少なくとも四首が③により矛盾のない説明が可能になることを示した。
10.伊勢物語享受の一側面―新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌―	単	2000年7月	『国語国文』第69巻7号	新古今集・新勅撰集と伊勢物語の共通歌の中には、伊勢物語の「男」の歌でありながら「よみ人知らず」として収録されている歌が少なからず存在する。これまでには伊勢物語が業平の実録として読まれたか否かという点を中心に議論されていたが、物語が実録か否かという問題と歌が実作か否かという問題は別の問題である。「よみ人知らず」とされる歌の中には、物語が業平の実録であっても業平が古歌などを借用した、と撰者たちが理解したものも含まれていると考えられることを示した。
11.西本願寺本系業平集と東山御文庫本業平朝臣集	単	1998年11月	『京都大学国文学論叢』創刊号	東山御文庫本業平朝臣集はこれまで西本願寺本系統の業平集に古今集・後撰集などにより歌を増補したものとされていた。しかし、詞書や歌句の異同を詳細に検討した結果、東山御文庫本のほうが古い形を保存していると考えられる場合も多く存在し、共通祖本の存在を想定する方が妥当であると考えられる。また、東山御文庫本の巻末七首の増補歌についても、これまでは古今集・後撰集からの増補とされていたが、これらの歌は小相公本業平集と近い関係にあることが考えられることを示した。
12.在中将集の性質と成立（下）	単	1998年3月	『国語国文』第67巻3号	「西本願寺本」「在中将集」の成立年代についての考察を加えた。家集への歌の増補、及び家集からの歌の削除の問題を中心に、さらに詞書の問題も加えて考察を進め、従来行われていた書誌学的な方法にとどまらず検討を加えることによって、「西本願寺本」の最終的な成立年代を院政期、少なくとも公任時代以降であることを確認し、さらに「在中将集」については「西本願寺本」以降の成立であることを論証した。
13.在中将集の性質と成立（上）	単	1998年2月	『国語国文』第67巻2号	現存する四系統の業平集のうち、孤本である「在中将集」については伊勢物語の成立の問題とも絡んでこれまでにも多くの論があるが、「西本願寺本三十六人集」系統の本との関係や成立年代については未だに定説を見ない。「在中将集」と「西本願寺本」との関係については、これまで主に書誌学的な方法により諸説が論じられてきたが、それに加えて両集の詞書の用語の問題にも着目し、両集の直接的な関係を証明することを試みた。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.「例の人」「例のやう」考―蜻蛉日記冒	単	2011年11月	高知大学国語国文学会第60回研究発	蜻蛉日記冒頭場面に用いられる「例の人」「例のやう」という２つの「例」は従来「普通、世間一般」の意味で理解されてきたが、本

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
頭場面の解釈をめぐって―			表会（於高知大学）	発表においては、蜻蛉日記や同時代の散文作品の用例検討から、作者の以前の異性関係を示す「今までの（男）」とするべき解釈を提示した。併せて古典文学の作品を理解する際の享受者の持つ価値観による「解釈の歪み」ということについても言及した。本発表の内容に加筆・修正を加え、同題の学術論文として発表した。
2.蜻蛉日記序説―いわゆる「兼家の求婚」場面を中心に―	単	2011年9月	中古文学会関西例会第29回例会（於大阪大学）	古典文学の研究において、「結婚」という言葉ははっきりした定義のないまま漫然と使用されてきた感が強い。蜻蛉日記の「兼家の求婚」場面の兼家の態度を非常識としながら、どう非常識であるのかということについて合理的な説明がされてこなかったのも、これを「求婚」であることを無意識のうちに前提にしてしまったためと考えられる。兼家に近い立場と考えられる摂関家男子の他の女性関係との比較から、上記の問題に対して新説を提示した。本発表の内容に加筆・修正を加え、同題の学術論文として発表した。
3.『新撰和歌』の構造―「相闘」「対偶」について―	単	2002年11月	高知大学国語国文学会第51回研究発表会（於高知大学）	紀貫之が土佐守として赴任した延長８年から承平４年の間に編纂されたとされる『新撰和歌』は、春歌と秋歌、夏歌と冬歌、恋歌と雑歌などを対として、１首ごとに交互に歌を並べるという、他に例を見ない特殊な配列形態を採っている。従来「語句的一致」という観点を中心に説明されていたこの問題に、古今集の配列や仮名序、「論春秋歌合」など当時の資料にも「対偶」的性質が読み取れることから、貫之の、また当時の和歌観の表出という新たな観点から考察を試みた。本発表の内容に加筆・修正を加え、「学術論文」の「新撰和歌の構造―巻一春秋を中心に―」として発表した。
4.伊勢物語享受の一側面　―新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌―	単	1999年11月	平成１１年度京都大学国文学会（於京都大学）	新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌の中には、伊勢物語の「男」の歌を「業平」の歌として収録する場合と「読人不知」の歌として収録するものがある。その原因について、新古今集・新勅撰集のその他の読人不知歌の考察を中心とする考察により、解明を試みた。本発表の内容に加筆・修正を加え、同題の学術論文を発表した。
5.業平集考―在中将集への展開を中心に―	単	1996年11月	関西平安文学会第１７回例会（於同志社大学）	在中将集を中心に、現存する四系統の業平集諸本の関係、及びそれぞれの成立年代についての考察を口頭発表した。本発表の内容に大幅な加筆・修正を施して「学術論文」の「在中将集の性質と成立（上）（下）」、「西本願寺本系業平集と東山御文庫本業平朝臣集」として発表した。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.片桐洋一「在中将集成立存疑 ―藤原定家の王朝文学研究―」	単	2018年1月	『国語国文』第87巻1号	『国語国文』通巻1000号記念特輯として企画された「『国語国文』この一篇」において、片桐洋一氏の「在中将集成立存疑 ―藤原定家の王朝文学研究―」を取り上げ、紹介した。
2.平安文学研究ハンドブック	共	2004年5月	和泉書院	本書は平安文学の主要な作品・作家について、その基本的知識や研究史・現状での課題を、専門の研究者のみならず卒業論文等でそれらの作品・作家を扱う学生も利用できるよう企画されたものである。 本人担当部分：在原業平 在原業平の伝記研究・歌風・私家集などについての研究情報をまとめた。
６．研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等	
年月日	事項